

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	調布市子ども発達センター		
○保護者評価実施期間	令和6年10月1日		～ 令和6年10月31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	38	(回答者数) 26
○従業者評価実施期間	令和6年10月20日		～ 令和6年11月10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	45	(回答者数) 36
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年1月10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	「あゆみの支援の基本・大切にしていること」が確立しており、その基本姿勢を職員が理解し支援にあたっている。	<ul style="list-style-type: none"> 子ども、保護者の気持ちに寄り添い支援をしている。 入職時、年度初めに必ず読んでいます。 基本姿勢を踏まえた新しい取り組みに挑戦している。 各種研修、ミーティングで職員同士が意見を交わす機会を設け、基本姿勢に触れるようにしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、全職員が理念を理解できるよう研修をする。 理念と具体的な行動が結びつき、職員ひとりひとりがさらに自分で考え行動していけるよう毎日のフィードバックを重ねる。
2	職員数が揃っており、子どもひとりひとりに丁寧な支援ができる。	<ul style="list-style-type: none"> 職員の経験や年齢層も幅広く、様々な職種も現場に入り、それぞれの視点から子どもを見ている。 チームワークを大切にし、感じた意見や疑問を出し合いやすい雰囲気を作り、支援につなげている。 子どもの状況に応じて、個別対応を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報共有が課題となるので、クラスフィードバック、各種研修、毎日のミーティング等を行っているが、より一層情報が確実に伝わっていくツールの工夫や、各自が自ら情報を取りに行く意識が必要である。 各職員の役割分担や配置の仕方を常に工夫して、チームで療育を行う。
3	市と法人が同じ建物内で事業を行っており、情報共有や連携を行いながら事業運営ができる。	<ul style="list-style-type: none"> 毎朝のミーティングを市、法人合同で行って、互いの事業の様子を把握できるようにしている。 管理職間の打合せ、防災や緊急一時養護事業に関するこの話し合いを定期的に行っている。 相談担当と連携をし、各児童、保護者への支援を考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童発達支援センターとしての機能強化を、互いに強みを生かしながら連携して行っていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	きょうだい支援や、地域に開かれた取り組み	コロナ禍にできなくなってしまった取り組みがあり、保護者を交えた行事や交流保育は少しずつ戻してきたが、きょうだいを含んだ行事、地域とのつながりまで具体的な取り組みができていない。	<ul style="list-style-type: none"> きょうだいを含めた家族支援をするための行事の設定 発達センターとしての地域支援に、通園事業の強みを生かして関わる
2	限りあるスペースでの環境整備	<ul style="list-style-type: none"> 細長い前庭の構造から、狭く感じる。 収納スペースの量と使い方を模索している。 突発的なことが起きたときや、悪天候時にスペースの確保に苦慮する。 事業の多様化、拡大による部屋の確保の難しさ。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どものニーズに合わせて、場所や活動人数を考え、クラス間で調整し限りあるスペースを活用する。 収納場所を決める。療育前、療育後の整理を徹底する。 発達センター全体でスペースを共有し、有効活用できるような事業間で声を掛け合う。
3	情報の外部への発信	<ul style="list-style-type: none"> あゆみの支援の概要を外部に広く伝えることが地域の力になっていくということを職員で認識していく段階にある。 	<ul style="list-style-type: none"> 支援プログラムの公表に加えて、具体的な事例等をホームページを用いて紹介していく。